

江東区とうきょうすくわくプログラム活動報告書

施設所在地	東京都江東区有明二丁目1番4号
施設名	武蔵野大学附属有明こども園

1 活動のテーマ

〈テーマ〉

響き合う心（発見と感動）  
～ICTたいむ(プログラミング)を通して～

〈テーマの設定理由〉

本園の幼児は日常的にタブレットPCに触れており、ICT機器への関心が高く、自ら操作したいという意欲も強く見られる。専門講師を招き、ICTたいむの時間を通して、子どもたちが発見と感動を響き合わせながら、発想を広げ創造力を育む活動を進めたく、本テーマを設定した。

2 活動スケジュール

【9～10月】 toio  
迷路・回転・魚釣りでロボットを動かして遊ぶ  
協力しながら基本操作を体験

【11月】発表（サンタミッション）  
プレゼント運びのプログラミング  
工夫して挑戦し、簡単に発表

【12～1月】 Springin'  
ボール転がしゲームをつくる  
タブレットで直感的に操作

【2月】 Scratch  
テーマ別のオリジナル作品づくり  
動きや音をつけ、全員で発表

3 活動のために準備した素材、道具及び環境の構成

toioのロボット教材とカードを購入した、子どもが試行しやすいように少人数で相談しながら取り組める環境をつくった。

#### 4 探究活動の実践

##### 〈活動の内容〉

toio では、前進・回転などの指示カードを組み合わせてロボットを動かし、迷路や課題に挑戦した。Springin' では、重力や動きの仕組みを使って簡単な作品を作り、Scratch ではテーマを決めてキャラクターを動かすプログラムを作成した。最後に発表を行い、工夫した点を共有した。

##### 〈活動中のこどもの姿、声、子ども同士や保育者との関わり〉

「どう動かす?」「もう一回やろう」と試行を繰り返し、友だちと相談しながら課題に挑戦していた。作品ができると「見て!」と嬉しそうに共有し、互いの工夫を認め合う姿が見られた。保育者は必要に応じて声をかけ、子どもの主体的な活動を支えた。



#### 5 振り返り

##### 〈振り返りによって得た先生の気づき〉

子どもたちの興味関心が今後さらに高まり、継続的に探究活動が行われるように常に環境を整えていくことが必要だと考える。今回の活動で得たことを将来生かせる機会があることを願っている

江東区とうきょうすくわくプログラム活動報告書

施設所在地	東京都江東区有明二丁目1番4号
施設名	武蔵野大学附属有明こども園

1 活動のテーマ

〈テーマ〉

響き合う心（発見と感動）  
～うんどうあそび(体操)を通して～

〈テーマの設定理由〉

都心に位置する本園では、園児が思い切り体を動かせる環境が限られている。園内でのうんどうあそび(体操)を通して、運動の楽しさを味わいながら挑戦や達成を経験し、子どもたちが互いに心を響かせ合い、発見と感動を共有する活動を進めたく、本テーマを設定した。

2 活動スケジュール

■ 年少（11月～3月）  
11月：徒手運動（動物歩行）  
          マット運動（横転）  
12月：鉄棒（ぶら下がり・コウモリ）  
2月：跳び箱（踏切・腕立て跳び上がり）＋調整運動

■ 年中（11月～3月）  
11月：鉄棒（腕支持ぶら下がり、逆位ぶら下がり）  
12月：跳び箱（踏切→腕立て跳び上がり）  
1月：縄跳び（持ち方・前回旋跳び）  
2月：マット（手つなぎ横転、前転）  
3月：鉄棒（逆位ぶら下がり、足抜き回り）

■ 年長（11月～3月）  
11月：マット（前転）＋ドッジボール  
12月：鉄棒（逆位ぶら下がり、足抜き回り、前回り降り）＋ドッジボール  
1月：跳び箱（開脚跳び）＋ドッジボール  
2月：ボール運動（投げる・捕る・的当て）＋ドッジボール  
3月：ドッジボール大会・年間のまとめ

3 活動のために準備した素材、道具及び環境の構成

・ マット、跳び箱、平均台、鉄棒、縄跳び  
・ ボール（大小）、布玉、コーン、マーカー  
・ 広い運動スペース、サーキットのための環境構成  
・ 年齢に応じた安全配慮（柔軟運動・順番待ちスペースなど）

#### 4 探究活動の実践

##### 〈活動の内容〉

年少から年長まで発達に合わせた段階指導のなかで、体を動かす楽しさを味わいながら運動あそびを行った。年少では動物歩きや転がる動き、ぶら下がりなどの基礎的な運動に親しみ、自分でやってみる意欲を育てた。年中では前転や足抜き回り、跳び箱では開脚跳びにつながる腕立て跳び上がりにも挑戦し、友だちと協力したり励まし合う姿も見られた。年長では前回り降り、跳び箱の開脚跳び、ボールではボールの弾み方に合わせた投捕を行った。各種目のなかで目標に向かって粘り強く挑戦する力や、ドッジボールを通じてチームで協力する姿が育っていった。

##### 〈活動中のこどもの姿、声、子ども同士や保育者との関わり〉

- ・「もう1回やりたい！」と繰り返し挑戦する姿が多い。
- ・できた瞬間に「見て！」と保育者や友だちに伝える姿が見られた。
- ・苦手な子には友だちが教えたり、応援したりする姿が自然に生まれていた。
- ・年長ではルールある遊び（ドッジボール）で、話し合いながら作戦を考える様子があった。
- ・保育者と子どもの応答性のある指導のなかで、考えながら動いていた。



#### 5 振り返り

##### 〈振り返りによって得た先生の気づき〉

- ・繰り返し取り組める環境を用意することで、できる・できないに関わらず挑戦意欲が高まること。
- ・成功体験が自信につながり、苦手な活動にも自ら向かう姿が見られるようになること。
- ・友だち同士の応援・協力が、活動全体の雰囲気大きく良くすること。
- ・「できた」を共有する時間（見合いっこ）が子どもの満足感に大きく影響すること。